中国社会主義論戦時期における張東蓀の言論とその反響

森川　裕貫

はじめに

本稿が考察対象とする張東蓀という人物は、二〇世紀の中国における哲学の形成と発展に対する多大な貢献で知られる。[1] また大学教授として教育に尽力する一方、複数の新聞・雑誌に関係し盛んな言論活動を行った。しかし中華人民共和国において批判の対象であったためか、その事績に比して研究は少なく未解明の点も多い。そのためその歴史的思想的位置づけは容易ではない。だが張東蓀は、『認識論』（一九三四年）に代表される抽象度の高い哲学的議論のみならず、民主主義や社会主義、また自由のあり方などにつき、中華民国建国以来最も思索を深めた一人であって、『理性与民主』（一九四六年）や『民主主義与社会主義』（一九四八年）をはじめとする著作や『庸言』・『再生』・『観察』などに発表された多くの議論にその成果を確認できる。またそれらはしばしば大きな反響を呼んだ。したがって民主主義や社会主義、また自由といった重要な論点が近代中国でいかに発展・変遷したのかを理解する上で、張東蓀は無視できない人物の一人である。

本稿は九〇年近くに及ぶ張東蓀の生涯の中から、一九二〇年前後に焦点を当てる。当時の張東蓀は日刊紙『時事

新報』、雑誌『解放与改造』を梁啓超の支持のもと率いており、中国の言論界において重きをなす存在だった。他方で一九二〇年一一月六日、『時事新報』に張東蓀が発表した「内地旅行で得たもう一つの教訓」（以下「もう一つの教訓」と略記する）という記事が、マルクス主義受容を進めていた当時の中国の知識階級の間で波紋を呼び、張も主役の一人となって中国社会主義論戦と呼ばれる論争が生じた。張東蓀の生涯において当該時期は、『時事新報』に毎日のように記事を執筆していたこともあり、最も活発に言論活動を展開した時期といえ、その思想の理解のために大きな意味を有する。

張東蓀がその一方の当事者となった社会主義論戦は、中国における社会主義の展開を理解する上で重大な意義を有すると位置づけられ、研究が少なくない。また関連する資料集もまとめられている。(2)

先行研究は論戦における張東蓀について概ね次のようにまとめている。すなわち中国でソヴィエト型の社会主義が直ちに可能かどうかという論点に着目しつつ、張東蓀が社会主義の実現以前に資本主義段階への到達が不可欠と主張したとまず指摘する。また目指すべき社会主義としてソヴィエトのようなボルシェヴィズムではなく、イギリスで誕生・発展したギルド社会主義を提示した点も、陳独秀らとの論戦の展開を跡付けつつ説明している。

だが、なお考慮すべき問題が残っていると思われる。第一に張東蓀がなぜソヴィエト型の社会主義に反対したのかという点である。この点につき先行研究は、中国とロシアの国情の違いなどを理由として示すが、(3)そのほかにも理由があり、それが張東蓀の思想にとり重要な意味を有していた。本稿はまずこの点を解明し、張東蓀の思想のより精密な理解を目指す。第二にいずれの先行研究も、論戦で張東蓀が批判されたのは、論戦における張の社会主義

理解が批判者たちと異なっていたからだとまとめている。正確な整理だが、張東蓀の議論が批判を受けた原因として、張東蓀を思想家ではなく政客と捉え、その姿勢を問題視するという立場から多くの糾弾がなされた点も見逃せない。つまり張東蓀への批判は、その主張への内在的理解による以上に、その政治的・人格的側面に由来する部分も大きかったのである。本稿はこの点につき、従来言及されていないギルド社会主義に賛同する人物による張東蓀批判を出発点として考察したい。今日、張東蓀を理解する上で、張の言論の分析に加え、それにどんな反応が生じたかにも目配りすることは有益であろうし、論戦そのものについてもより広い文脈での理解が可能となろう。

一　社会主義論戦概観

(1)「もう一つの教訓」以前の状況

社会主義論戦において張東蓀がいかなる主張をし、それに対しいかなる批判がなされたのか、この点は先行研究が考察してきた問題だが、本稿の議論にとり重要な点なので改めて確認しておきたい。

まず留意すべきは、論戦の引き金を引いた「もう一つの教訓」以前、張東蓀が社会主義に関しどんな見解を示していたのかという点である。

一九一九年、『解放与改造』の創刊号に発表した「第三種文明」において、張東蓀は宗教を基調とする「第一種文明」や、個人や国家、資本主義を基調とする「第二種文明」ではなく、社会主義と世界主義を基調とする「第三種文明」の実現に努力すべきだと主張した。張東蓀は、中国は第二種文明にすら達していないが、西洋世界が第三

種文明に向かっており、中国もその潮流に乗って直接第三種文明を目指すべきだと判断していた。[4]

この見解と比較すると、「我」と「客」という二人の対話形式で発表された「我々はなぜ社会主義を講じなければならないのか？」は慎重さが目立つ。[5] 張東蓀は近代の物質文明の発達が、貧富の格差を拡大させ、その是正のため社会主義や社会革命が必要だとの認識を示している。但し「社会主義という一つの名詞は各種各派の社会主義を包含」しており、「社会主義の定義は各人で異なっている」とも指摘する。それでは中国の社会主義はいかにあるべきなのか。

張東蓀は社会主義における「制度の選択」、つまり国家社会主義における生産国有説、ボルシェヴィズムにおける無産者専制説、ギルド社会主義におけるナショナル・ギルド説などの適用を考慮できる各国とは異なり、「中国は今日まだこの状況に至っていないので、具体的な計画を作成できない」と断じる。その上で「我々が主張する社会主義」は、ギルド社会主義でもボルシェヴィズムでもアナーキズムでも国家社会主義でもない「質朴な方向性」にすぎないが、しかし「唯一の方向性」であって、この方向に進むべきだと唱えた。

慎重な叙述だが、この文章でも、社会主義が目標として示され、その実現への努力を説いたといえる。実際当時はそう捉えられた。

だが世界的に高い名声を得ていたイギリスの哲学者バートランド・ラッセルの中国訪問の頃から、張東蓀の論調に変化が現れる。より正確には、張東蓀自身の意識はともかく、多くの人々によってそのようにみなされ、その変化が問題視されることになる。

（2）「もう一つの教訓」以後の状況

張東蓀も参与する新学会などの団体が中心となってなされた招聘に応じ、ラッセルは一九二〇年一〇月二〇日に中国に到着した。[6] ラッセルはまず杭州や南京、湖南省などを巡り講演を行った。このとき張東蓀も同行しており、ラッセルとの交流を深めたようである。

上海に戻った張東蓀は、『時事新報』に「内地旅行で得た一つの教訓」・「もう一つの教訓」を発表した。[7] 特に「もう一つの教訓」で張東蓀は、中国内地の状況を上海のような通商港とは異なり、「貧乏」に苦しみ、その程度は「人としての生活」を享受できないほどだと描写した。興味深いのは、この状況の解決のためにある特定の主義に依拠することはできないとわざわざ指摘している点である。その理由として貧困に苦しむ状況下で何らかの主義を語る資格はそもそも存在しないという舒新城の見解を挙げている。[8] 張東蓀によれば、状況打開のために取り得る選択肢は、「実業の開発」を通じた「富力の増加」という方法のみである。同時に、「ラッセル氏は各地の状況を観察して以降、中国は実業を開発する以外自立できないと述べている」と張東蓀は述べ、自身の主張がラッセルに共鳴するものだと強調した。

「もう一つの教訓」に対しては、レーニンの率いるソヴィエトに対する共感から社会主義の研究に取り組んでいた李達や陳望道、邵力子が直ちに反論を発表した。張東蓀は「もう一つの教訓」の中で社会主義の必要性を明確に否定したわけではないが、彼らはあらゆる主義の効用を否定する張東蓀が、事実上「社会主義を講じず、実業を開発していこう」と唱えていると捉えていた。[9] 彼らは実業の開発による富力の増加の必要性については完全に同意し

たものの、それが社会主義の原則によってなされない限り、略奪する人々と略奪される人々という区分を生み出し、多くの人々は依然として人としての生活を享受できないと指摘した。(10)

こうした批判に対し、張東蓀はどう応答したのか。批判がなされて後すぐに発表した一文の中で、張東蓀は「もう一つの教訓」の内容を詳細に説明し、自身の立場をより明確に打ち出している。(11)

この文章の中で張東蓀は、呉稚暉の「人類にはただ二種の区分が存在する。一つの区分は輿に座る者、もう一つの区分はその輿を担ぐ者である」との発言を引き、もし中国の現状がこのとおりならば、社会主義を提唱しても異存はないと述べている。しかし張東蓀の判断では、中国の現状はこの段階にすら至っていない。中国では、「多くの人々が輿を担ぎたいと望んでいるがかなわない」、つまり十分な雇用が存在せず労働者階級が完全には出現していない。したがって中国では資本家と労働者の間に階級闘争が生じる可能性は現在皆無であり、これは将来に生じうる問題である。張東蓀は現在必要なのは実業の開発による「物質生活」の救済、及び「労働の改良ではなく、労働の創造」だと述べ、そのための具体的方法として、中国の資本家に着目した。その上で中国の資本家が外国の資本家の圧力により苦境に立たされているので、現在は彼らを支援し「外国の資本勢力の空隙に乗じて実業を開発する」よりほかにないと言明した。

この張東蓀の議論に対し、上海で中国共産党の結党を主導した陳独秀が反論を展開した。まず注目すべきは両者の議論の前提が異なる点で、陳独秀は「資本主義生産制の下では、資本家が外国人であろうと中国人であろうと多くの人々に人としての生活を得させられない」とし、資本家の積極利用を説く張東蓀の見解を一蹴する。(12) そしてマ

ルクスの学説に詳しい戴季陶の議論を踏まえつつ、資本家と資本は同一ではないと指摘し、実業の開発の際に必要となる資本は、資本家や資本主義に依拠せずとも調達できると述べている。さらに中国のような幼稚で組織を有さない民族は、政治的経済的侵略が日一日と迫る状況下にあって、「自然による Evolution」は選択できず「人為による Revolution」によってのみ事態の打開を企図できると主張した。

だが陳独秀による批判を受けても、張東蓀は「実業の発展はいかなる方法によるのであれ一部の人民の富を増加させるのであり、たとえその分配の程度が等しくなくても、資本家のみが利益を得て貧民には少しも利益がないとはいえない」と述べ、その立場を変えなかった[13]。そして「労働者の困苦は事実だが、その苦難を直接資本家から受けている者は極めて少なく、大半は労働者の頭目に由来すると知るべきである」、「労働者の頭目は労働者を虐待し収奪するばかりであるため、労働者の道徳が堕落し常に労働を怠けるという事態を招いている」と指摘し、労働者の困苦と資本家の無関係を強調すると同時に、労働者の頭目こそが問題の元凶だと断じた。

中国では資本家の存在に関わりなく、働く場に大きな問題があると感じていた張東蓀は、資本家が学校を設けて労働者を教育し、労働者の頭目を廃して労働条件の改善を進めるなどの「温情主義」を実施する方が、中国の労働者にとって利益があると提言した。そして「教育の普及には時間がかかる。生活の改良には種々の方法があるが、必ず教育と関連するので平和的漸進的に進めるのが望ましい」と述べ、「人為による Revolution」と決別する姿勢を明示した。

この点について張東蓀はさらに「段階説」という考えを打ち出し[14]、資本主義の段階を経なければ社会主義には移

行できないし、またその移行を強引に企図してはならないと表明した。同時に張東蓀は、「学問上の社会主義」と「信仰上の社会主義」という区分をわざわざ提示し、自身はあくまで前者の立場を奉じると明示する一方で、後者は宗教と同様に「熱烈な感情」のみによって支えられており、社会主義の研究を阻害すると述べている。また民国建国以来、「日本のようなまじめな紹介と学理上の検討」とは無縁の「プロパガンダ」のみに依拠した社会主義が横行していると嘆いている。

名指しはしていないが、この批判が陳独秀らに向けられていたのは明らかである。張東蓀にとり、直ちに革命を起こしソヴィエトのように中国を作りかえようとするのは、「学理」を欠いた「感情」論にすぎなかった。そしてこうした急進的感情論に冷や水を浴びせるように、「赤化」したソヴィエトが資本主義諸国との通商を必要とし、資本主義に対し寛容にならざるを得ない状況に陥っているとその行き詰まりに言及している。また「共管」、つまり「各国が共同して中国を管理する」という段階を経なければ、中国の資本家階級は勃興できないとまで述べ、社会主義はおろかその前段階としての資本主義への到達にも厳しい制約が伴っていると注意を促した。(15)

張東蓀は共管が必要な理由について説明しておらず、詳細は必ずしも明らかではない。但し「中国の問題は世界の問題だが、中国は主体としては世界の問題を解決できない。世界に変化があって後、中国はようやく変化できる」、「人々は中国の問題は世界の問題だという。これは正しい。但しこれは世界が自発的に問題を解決して中国問題の解決に影響を与えうるといっているのであり、中国が自ら問題を解決して世界に影響を与えうるといっているのではない」と述べ、(16) 現在の国際情勢では中国は客体であって主体たり得ないと明示しているので、資本主義の形成も

含めたあらゆる問題解決において、中国の主導権発揮は不可能との判断が働いていたのだろう。

二　張東蓀の社会主義論

（1）ギルド社会主義への賛同

前述したような厳しい認識を示したとはいえ、張東蓀は社会主義の実現を完全に放棄していたわけではない。張東蓀はあくまで社会主義を最終的な目標として見据えていた。但し注意すべきは、社会主義論戦において張東蓀が目指すべきとした社会主義は、ソヴィエトにおけるボルシェヴィズムを模範とするものではなく、イギリスを発祥の地とするギルド社会主義であった点である。張東蓀は「一つの説明」という文で、「現在各種の社会主義には皆欠点がある。しかし私はギルド社会主義はそのほかのものと比較して最も申し分がないと思う」、「最も遅く生まれたものは比較してみて必ず最も申し分がない。ギルド社会主義のように最も遅く出現したものは、だから比較してみて最も申し分がない」とその理由を述べている。[17] 多くの先行研究も指摘するように、最新にしてそれゆえ不備が最少というのが、張東蓀がギルド社会主義に賛同する理由だった。

イギリスにおいてギルド社会主義を唱えた人物は複数存在し、それぞれの主張の間には差異が存在するが、張東蓀は後にコール（G. D. H. Cole）の *Social Theory*（1920）を呉献書とともに『社会論』（一九二二年）として訳出しており、代表的理論家というべきコールの主張に強い関心を持っていたと考えられる。

コールは元々フェビアン協会の一員だったが、集産主義を採用し消費者の立場を重視する一方、生産者の立場を

無視しがちだったフェビアン主義に不満を抱き、ギルド社会主義を提唱した。その具体的内容として、生産者を尊重し賃金制度を撤廃する、労働組合などの生産者諸団体を「ギルド」として再編成し各ギルドに大きな裁量権を与えその自主性を重視する、既存の議会制度を否定し職能代表的民主主義導入を図る、国家の地位や役割を相対化しギルドや消費者の団体また教育・公衆衛生・文化などに関する団体がその機能に応じ自立的に活動するよう期待するといった点が挙げられる。(18)

従来必ずしも注意されていないが、前述した陳独秀らとの論争の過程で張東蓀がこうした内容に詳しく言及することは稀である。こうした点への賛同を示すことはあったが、(19)陳独秀らへの反論では主たる論点とはなっていないのである。

そもそも張東蓀は「一つの説明」で、ギルド社会主義も含め全ての社会主義が「研究修正」の過程にあるとし、さらなる研究が不可欠だとも付言している。(20)その具体的な方策として、書籍を翻訳し人々に共同研究の機会を提供するとしている。また同文で中国に元来存在する「同業公会」をギルド社会主義の実現に利用できると記したが、同業公会、あるいは行や会といったギルド的組織に注ぐ視線は実は厳しい。張東蓀は「中国の三百六十行〔各種職業団体の総称〕は、各々の行がそれぞれ社会を形成している。この種の社会は大きな排外性と壟断性を有しており、いたるところ全てで専制的組織となっている」と指摘して、中国の行の排外性と壟断性の強さに警鐘を鳴らしていた。(21)さらに「中国の奇妙で幼稚な同業公会は同業公会社会主義の主張するものの一万分の一にも及ばない」とも述べ、(22)中国のギルド的組織の未熟さを嘆いていた。

つまり張東蓀は、ギルド社会主義に賛同したとはいえ、陳独秀らとの論争過程でその特色にあまり言及せず、中国での実現可能性についても厳しい見通しを持っていた。それにもかかわらずギルド社会主義を提起したのはなぜか。もちろん最新・最良ということにもよろう。また交流を深めたラッセルが、その著作 *Political Ideals*（1917）で、一方で国家社会主義・サンディカリズム・アナーキズムの欠点を指摘しつつ、他方で人の「創造的衝動」を拡張し「私有的衝動」を抑制する社会主義としてギルド社会主義を推奨していた点にもよろう。張東蓀は「ラッセルの政治理想」という同書の詳細な解説記事を執筆しており、ラッセルの評価をよく理解していた。[23] またギルド社会主義が、最新の社会主義理論としてイギリス、さらには日本で高い支持を得ていたことも背景にあっただろう。[24]

（2）ボルシェヴィズムへの反発

張東蓀がギルド社会主義に賛同した背景として同時に注意すべきは、ソヴィエト型の社会主義、つまりボルシェヴィズムに張東蓀が決して賛同できなかった点である。この時点での張東蓀のボルシェヴィズム理解は必ずしも厳密ではないため、それに対する評価もやや簡単に過ぎる印象を受けるが、以下では張の論拠を確認したい。

批判者たちへの反論の中で、張東蓀は「労農主義」、つまりソヴィエトで実施されている社会主義の中国での実現に懐疑的態度を示す。[25] その理由としてまず張東蓀は、中国が広大であって何か一つの主義を実行するのは無理であり、ただ「地方の自決」のみが存在してきたという状況を挙げている。加えて中国の人民は歴史的に「無政府思想の慣習」に浸っており、政治権力に依拠して労農主義を実施するのに適さず、むしろ「社会の自動」、つまり国

家とは無関係に社会が自主的に活動し人々が生活していくという現象が顕現しやすい、そのため労農主義の理念である「貧民専制」と矛盾が生じるとも指摘している。つまり中国の広大さと地方の自決、社会の自動という伝統はソヴィエトの重要な理念であるプロレタリアート独裁と相容れないのである。中国の特殊性がボルシェヴィズムに適合しないとの論拠は、先行研究も指摘する点だが、張東蓀がボルシェヴィズムに反発した理由はこれのみにとどまらない。

張東蓀はレーニンの事例を引き、多数者の意思がある特定の一個人の専断的権力に服するよう求める「ソヴィエトデモクラシー」を「奇怪」と評した[26]。また張東蓀は「倫理」においては「自律」は確かに重要だが、「政治」においては「他律」が重要で、全ての人に欠点がある以上、「どんな人が政治を執るのであれ、周囲が監視しなければならない」と考えていた[27]。そしてこの点を全く認めない「ソヴィエトデモクラシー」に何らの共感も示していなかった。

また「ロシアの過激主義の伝染は非常に恐ろしい」と過激主義、具体的にはやはりボルシェヴィズムに非常に強い警戒を示した[28]。なぜなら「過激主義はあらゆる個人は平等であると考えるので、ただ一つの階級しか存在しない。このため資本家と学者を全て労働者に変化させる」との状況に陥っているからである。しかし張東蓀は「人類の平等は地位の平等ではなく、機会の平等である。機会は平等だが、各自が運用できる機会は同じではないから、自ずと不平等の現象がある。しかし無理に平等を強いれば、自然に反し退化であって進歩ではない」と指摘し、過激主義の見解に同意しない。代わって「人々は全員がただ一つの階級として存在はできないが、階級間の差異が大きす

ぎてもいけない。だから極端に過ぎる両端を取り除き中間の部分を残せばよい。しかし中間の内部には種々の小さな差異が存在していなければならない」との意見を示した。つまり張東蓀は階級間格差の拡大には反対しつつも、その強制的解消は危険視し、人の多種多様なあり方を尊重しようとした。このような人のあり方が、進歩をもたらすと考えていたからである。張東蓀はつとに「社会は異なる種々の要素・勢力・団体が調整しあって成立している。社会の各部分が常に平衡状態を得ていれば、一切の利益は一勢力によって併呑されず、各自はふさわしい立場を得て相互に安寧を得られる。ふさわしい立場を得ようとすれば、相互に異なる勢力の保全から始めるべきである」とも述べており[29]、ボルシェヴィズムのような理念に対する反発は早くに胚胎していたといってよい。

またラッセルの役割も見逃せない。ラッセルは中国に到着してまもなく行った講演で、ボルシェヴィキは過酷な手段で人々の言論と出版の自由を奪っており、こうした過酷な手段は必ず反抗を生み戦争を引き起こしかねないと、ボルシェヴィズムの危険性に注意を促していた[30]。張東蓀はラッセルについて、「ラッセル先生の人格に私は一二〇パーセント敬服している」、「彼は中国に来て以降、小規模な講演を何度となく行っているが、十分に研究していない事柄に対しては決してむやみに陳述しない」、「彼はロシアに滞在した際、労農政府の厚遇を受けたが、真理を重視しているので労農政府のやり方はやはり理にかなっていないと考えた。彼は本当の学者である。良心を備えた学者である」などと述べ、その人格を称揚し心酔していたから[31]、ラッセルとの交流が張東蓀のボルシェヴィズム否定の立場をより明確化することにつながったといえよう。

陳独秀らとのやりとりにおいて明示されなかったためか、張東蓀が専断的権力による平等の強制に反発していた

点は注目されてこなかった。だがこの側面こそが張東蓀にボルシェヴィズムを峻拒させたのである。そして残された社会主義の中から最も適切と考えられたギルド社会主義が目指すべき理念として掲げられた。

こうした構造を持つ張東蓀の社会主義論が厳しい批判にさらされたことはすでに確認したが、それでは同様にギルド社会主義に賛同する人々からはどのような評価を受けたのか。その点も確認したい。

三　我が族類にあらず——高一涵による批判

一九二〇年前後の中国において、ギルド社会主義は社会主義の一つのあり方として注目を集め、関連記事が少なからず発表されるようになっていた。張東蓀が主導する『解放与改造』はその中心の一つであったが、ここではそれ以外の議論を見ておきたい。

たとえば程振基という人物は、「労農主義」は「貧民専制」により各個人が自由にその特性を発揮する根拠を奪うという欠点があるとして、ソヴィエト型社会主義に強い警戒感を示す一方、「私はギルド社会主義が中国の工業を最も促進し、またこの主義が容易に実施できると深く信じる」との見解を表明していた。(32) 程振基は「張東蓀氏もまたギルド社会主義を深く信じる一人である」と述べ張との共通点を隠さないが、直ちに「彼と私が異なる点は、この主義を実施する時期にある」、「私は現在こそ資本主義を打倒し、ギルド社会主義により代替すべきだと考える」とも指摘して張と袂を分かつ。その論拠は「実業開発には資本のみが必要であり、資本家は必要ない」、「たとえ資本家（私有）がいなくても、資本（公有）があれば、実業を開発できる」というもので、陳独秀らと類似していた。

ギルド社会主義を提唱した人物の中でとりわけ注目すべきは、張東蓀同様、ラッセルの思想を解説する記事を執筆し、またコールの文章の翻訳も行っていた高一涵による議論である。[33] 高一涵は張東蓀が主張する実業の開発や富力の増大は、中国にとって当然必要だとしつつも、「我々は資本主義が歴史の経験上露呈してきた種々の弊害をよく知っている。我々はまた社会主義がこの種の弊害に対策を講じ解決を企図していると明確に認識している。我々は中国が現在すでに資本主義の病に侵されているか侵されていないかを認定する必要はなく、社会主義の方法を用いてこの病を治癒する、あるいは事前に予防すべきである」と説いた。[34] また実業開発や富力増大の過程では「資本のみが必要であって資本家は必要なく、資本主義を提唱する必要はさらにない」とやはり陳独秀らと同じ理由に基づき、資本主義段階の経過は不必要と張東蓀を名指しして断じた。

ともにギルド社会主義に賛同し知的関心が類似するにもかかわらず、高一涵が張東蓀を批判したのは、もちろん段階論に同意できなかったからである。だが高一涵が別の観点から張東蓀につとに不満を抱いていた点は注意に値する。高一涵は前述した張東蓀への批判に先立ち、胡適への書簡で張の羅家倫への書簡を取り上げ、「我が族類にあらず」との厳しい評価を下していたのである。[35]

張東蓀の羅家倫への書簡は『新潮』の中心人物の一人である羅が発表した『解放与改造』への評価に対する応答として執筆されたものである。[36] 羅家倫は張東蓀の「ラッセルの政治理想」を取り上げ、翻訳や書名の誤りを事細かに指摘したが、張は「思想の誤解と書名の誤解は別々の事柄」であり、「書名について誤解した人を思想についても誤解する人とはいえない」と反論した。[37] 実際には羅家倫は翻訳上の誤りを指摘しただけで、張東蓀の思想そのも

のに問題があるとは述べていない。微に入り細を穿つ訂正をされて張東蓀は苛立ちを覚えたのだろうが、張が狭量さを露呈したのは否めない。

だが怒りが収まらなかったのか、張東蓀の反論はほかの点にも及ぶ。張東蓀は「政治経済の面で全てを制するトラストに反対するのみならず、学術思想の面で専制魔王の出現に反対する」との季融五の意見に賛同しつつ、「現在、新思潮を専売する真の老舗があるとして、「この一軒のみでのれん分けはしない」、「看板に偽りはなく偽者を厳禁する」という看板を掲げる者があると聞く」が、新思潮の発展のためには、この種の「誤解」の除去が必要と唱えた[38]。

この言及は羅家倫が属する『新潮』にも向けられていると考えてよいだろう。新思潮にどう接するかをめぐり、張東蓀と『新潮』を主導する傅斯年が論争を展開していたからである。傅斯年は「中国は歴史と文化を有する国家であり、中国で新道徳・新思想・新文芸を提唱すれば、いたるところで旧来のものと衝突する」、「我々は一方で新道徳・新思想・新文芸の創造から始めるべきであり、一方で旧来のものを破壊する主義を発表すべきである」と主張したが[39]、それに対し張東蓀は「我々は中国が新道徳・新思想・新文芸を必要とすると認める以上、それらの十分な導入に尽力すべきであり、旧道徳・旧思想・旧文芸に戦いを挑んではならない。なぜならそれらは自然と消滅するからである」と述べて反対を表明していた[40]。

張東蓀は「新青年の一派」に対し、「古い衣服を着ている人々に対し高圧的な態度でその衣服を脱ぐよういつも迫っているが、新しい衣服を作ってそうした人々に着せようとしていない」との批判を展開し、「旧思想の破壊と

新思想を伝え広めるのは別の事柄であり、旧思想の破壊を新思想の宣伝・導入とみなすのは大きな誤りだ」と指摘していた。[41] 張東蓀は新思想の宣伝・導入が進めば旧思想は自ずと消滅する、だから旧思想の「破壊」に力を割いてはならず、新思想の「建設」に全力を傾注すべきと考えていたのである。[42]

おそらく、張東蓀から見て、『新潮』をも含む新青年の一派による旧思想への批難と新思想の提唱は、専制魔王や専売といった表現に象徴されるように、しばしばあまりに排他的・画一的で容認できないものだった。また青年たちの現状への不満には理解を示しつつ、しかし彼らが新たな説を批判せず鵜呑みにする様を「思想中毒」と呼んで問題視し、「古い偶像を破壊した後に、新しい偶像の前に同じようにひざまずいてはならない」とも警告していた。[43] やはり排他的・画一的性質を有するボルシェヴィズムに対して示した強い警戒感がここでも働いていたと見るべきである。だが『新潮』の前身ともいうべき『新青年』の編集に参与し、北京大学の教員として若い世代と親しく接していた高一涵にとって、新思潮を専売しているとする張東蓀の主張は許せないものだった。また誤訳の指摘を素直に受け入れず、『新潮』批判に転化するような姿勢にも反感を覚えていたかもしれない。こうした点も高一涵が張東蓀のギルド社会主義論に賛同できない要因を構成していたといえよう。

四　監視される監督者

見落としてはならないのは、当時張東蓀が受けていた批判や不満がほかにも多々あったという点である。張東蓀は「私も政界に入らないと誓いを立てた人間である」[44]、「ほかの人々は党という基準に依拠して私を排外で

きず、私も党という基準に依拠して彼らを拒めない。つまり私はやはり本来の志に基づき不党により人に接する」[45]、「私はつとに現実政治とは無関係と宣言した」[46]といった考えを一度ならず公にし、現実の政治や党派からは超然として言論を展開するとしていた。

張東蓀がこのように述べたのは、「政治以外の事柄は自由な発展に任せるべきで、そのようにしてはじめて政治を縮小できる」、「どのようであれ、政治権力は適当な範囲内にとどめ、過大にしてはならない」といった言明に明確なように、全ての事柄が政治に関係づけられることや、政治権力の一か所への集中を強く警戒していたことが背景にある[47]。あらゆる人々が政治の世界の住人となれば、人々の多様なあり方や進歩が阻害されるとの懸念もあっただろう。

政治を縮小し政治権力を相当の範囲内に収めるため、張東蓀は政治について「政治上の事務の執行」と「政治の監督」という二つの区分を設け、工・商・農・教育といった各種の職業に就いている人々が、政界に入らず政治の監督をするべきだと説いていた[48]。なお張東蓀によれば、張らのような新聞記者は「真の人民」、つまり工・商・農・教育といった人々とは異なり、「準政客」としての性質を免れないが、政治権力に過度に接近せず政治を監督する役割をやはり有する[49]。要するに張東蓀は、現実の政治権力とは独立した形で政治を監督する必要性を痛感し、政治権力への接近を戒めたのである。

だがこの張東蓀の見解は「あなたはベテラン記者であって政治生活の中にいる人だ」、「新聞記者が政治に全く意味がないと述べても誰も信じない」との批判を『民国日報』を取り仕切る葉楚傖から受けた[50]。張東蓀は政治に全く

意味がないとは考えておらず、新聞記者は準政客だと認めてもいたので、この批判は必ずしも適当ではない。ただ張東蓀の議論は現実の政治情勢に対する批評や提言を多く含み、何より張が研究系の言論機関と言うべき『時事新報』や『解放与改造』を率いていたのは周知の事実だった。進歩党を前身とする研究系は、梁啓超を精神的支柱とし、その活動範囲は学術・教育・メディアから政界に及び[51]、張東蓀はその要人とみなされていた。葉楚傖の批判もこの点を前提に行われたと読むべきである。

問題は張東蓀が政治権力と適正な距離を保っていないと見られた点、つまり準政客にとどまるのではなく政客に堕していると捉えられた点にある。そしてこうした見方をしたのは葉楚傖に限られない。たとえば茅盾は、元々陳独秀らと同様、唯物史観に深い関心を有していた張東蓀が「もう一つの教訓」でその論調を一八〇度転換したのは、梁啓超率いる研究系の方針に従わなければならなかったからで、内地を視察して教訓を得たというのは取り繕いにすぎないと指摘し、張が研究系の意向を考慮して行動したと判断していた[52]。またラッセルの中国来訪時、通訳を務めた趙元任は、研究系の指導者である梁啓超や張東蓀に利用されその声望を高めぬよう胡適らから注意を受けていた[53]。こうした評価を下されている人物があらゆる党派と無関係と宣言しても、本人の意識はどうあれ多くの人は信じるに値しないと判断しただろう。政界から距離を置き政治の監督者たらんと欲した張東蓀は、多くの人々から政界の住人とみなされ、その言論や行動は警戒・監視の対象となってしまったのである。

また張東蓀は「今後教育事業を盛んにできれば、教育に専念したい」、「それがかなわなければ、翻訳や著述を行い哲学に専門的に取り組みたい。決して政論はなさず、また社会運動もせず、深く考えつつも世の変化に対しては

静観したい」との意向も明らかにしていた。[54] だが翻訳や著述が批判を招いた点は確認したとおりであり、[55] さらに教育事業への専念も実際には多くの軋轢を生んだ。

張東蓀の師ともいうべき梁啓超は、『大中華』雑誌創刊の頃から「社会事業」、その中でも「社会教育」への献身を表明したが、特にヨーロッパ訪問から帰国した一九二〇年以降、学術団体の設置や著名校の教員職獲得を通じて教育事業の推進に力を尽くし、張もその主要な参与者となっていた。[56] 張東蓀も積極的に参与したこの教育事業には、教育の普及を通じ人材を育成するとの目的があったのは確かだが、同時に自派の影響力を高めようとの意図があったこともおそらくは否定しがたい。少なくとも当時はそのように捉えられ、自分たちのための教育事業という冷ややかな判断を下されていた。

実際、傅斯年は北京大学に対し張東蓀が何らかの野心を抱いていると憂慮する友人がいると述べている。[57] 邵力子はこの指摘を取り上げ、この種の疑いを持たれてはならないと警告していた。[58] 邵力子は後に「私は張東蓀氏が北京大学の校長になりたいと希望していたと知っている。幸いにもその目的は達せられなかったが、もし達せられていたら、北大の学生運動はもっと早く生じていたと思う」と述べ、この野心が北大校長職獲得を目指すものだったと指摘している。同時に「張東蓀氏は教育界のために尽力しようとしており、それ自体はよいが、惜しむらくは彼が「校長でなければ尽力しない」との様子であることで、「経験もなく権威を乱用する」という弊害を生んでいる」と酷評し、張の教育事業の動機を問題視していた。[59]

以上の点を踏まえると、「もう一つの教訓」以前に張東蓀の言論は猜疑と不信を向けられており、張東蓀はつと

に批判を受けやすい立場にあったといえる。そもそも社会主義論戦にしても、単に社会主義理解の相違によって生じたわけではなく、張東蓀に対する猜疑や不信から勃発したという側面もあった。「もう一つの教訓」以降の張東蓀の言論については、「最近、賢人政治から社会主義へと変じた某新聞の記者は、湖南省に一度行っただけであっという問に主張を変えた」との言明によく表現されているように、前触れもなく転換が生じたと捉えられた。[60] そしてこうした転換については、「かつて「我々はなぜ社会主義を講じなければならないのか?」と説いた張東蓀は、突然「社会主義を唱えてみても必然的にどんな結果も得られない」と述べるに至った。このような転換を我々は論壇上の大事件であり、急ぎ是正しなければならないと考える」、「東蓀君が良心から言論を発しているのならば、正々堂々と転向の理由を明確に答弁するべきである」との説明責任を求める意向が示されていた。[61] つまり社会主義理解の相違のみならず、突然の態度転換を張東蓀の批判者たちは問題視していたのである。「しかし東蓀君は意外にも全く相手にせず、我々をひどく失望させた」との所感が示されたように、[62] 張東蓀の態度は批判者を納得させられず、論戦は継続した。論戦以前から問題視されていた張東蓀に対する不信や猜疑は、論戦の勃発やその過程でも大きな影を落としていたのである。

結　論

それでは張東蓀は自身に向けられた厳しいまなざしをどのように受け止めていたのだろうか。張東蓀は後年当時を振り返り、社会主義という同一の主義が国情に応じて、イギリスではギルド社会主義、フランスではサンディカ

リズム、ロシアではボルシェヴィズムとなっているので、「中国は中国の社会主義を持つべきだ」と説いたとし、「だから私は当時社会主義に熱心な友人たちに忠告して、社会主義は中国において実行できないものではない。ただ中国の国情に合致した社会主義が必要だ」と述べたと記している。(63)

この回想が「我々はなぜ社会主義を講じなければならないのか?」を指していることは明白である。同時に張東蓀は同文で、資本主義段階の経過を明言したわけではないにせよ、社会主義における制度の選択が可能な状況に中国は至っていないとし、中国での社会主義の実現が各国に比して困難だとも指摘していた。

張東蓀は「もう一つの教訓」以降、資本主義段階への到達を求めたが、それはこの困難の克服策として述べたとも考えられ、またその後、社会主義段階への到達を否定したわけではない。したがって「もう一つの教訓」において、張東蓀は突然立場を転換したつもりはなかっただろう。張東蓀はむしろ、より具体的・現実的に社会主義実現のための道筋を示したつもりだったのではないか。但し張東蓀自身が批判の噴出に無頓着であり、「私の書いたつまらない短評が際限のない風波を引き起こしたが、世間で一つの懸案となっているのは非常な光栄だ」と歓迎すらしていた点も見落とせない。(64)

張東蓀は人類の進化を阻む第一の力として「強権的独断」、第二の力として「偏執的迷想」を挙げ、科学研究の分野と異なり権力が大きく絡む政治の分野ではこの二つの力は強まると指摘した。(65) この力を打破し「政治の進化」を実現すべく張東蓀が重視したのが「懐疑」であり、一例として個人主義は国家主義、社会主義は個人主義、無政府主義は社会主義への懐疑から生まれたとの理解を示している。懐疑の重要性の強調と同時に、ウォルター・バジョッ

トの *Physics and Politics*（1872）に示唆を得て、複数の人々によってなされる「討論」が文明の進歩を牽引した点にも張東蓀は注意を喚起している。バジョットは討論が旧来の習慣を打破し文明を進歩させたと考えたが[66]、張東蓀はこの見解に賛同していた。要するに、張東蓀は自身の言論を懐疑の表出として位置づけつつ、ほかの人々にも懐疑するよう奨励し、そこから討論が生じれば政治の進化に貢献できると考えていたように思われる。なおボルシェヴィズムへの反対も、懐疑や討論の生じる余地を許容しなかった点に由来しよう。

但し張東蓀の言論は政治の進化につながるような建設的討論を創出できなかった。バジョットは討論の重要さを指摘した際、人々の「偏狭 bigotry」は強固なので、討論を充実させるためには、「寛容 tolerance」が欠かせないとしたが[67]、張東蓀とその批判者たちの間に寛容はほぼ成立しなかったといわざるをえない。張東蓀の批判者たちは彼の議論を丁寧に吟味し内在的に批判するよりは、あらかじめ確定した結論へ向かい議論を展開しがちだったからである。

もちろん批判者たちが張東蓀の議論を真摯に検討しなかった原因は張東蓀にも帰せられるべきものである。特にあらゆる党派との無関係を標榜しながら、研究系の一員としての外観を払拭できなかったことは、同時代人の不信を招くのに十分であり、先入観を捨て張東蓀の議論を綿密に検討しようとの意欲を損なわせた[68]。張東蓀は五四運動以後、自分の基準のみで他者を批判する「批判恐慌」が蔓延していると嘆いたが[69]、そうさせる要素を張自身が持っていた。

しかし張東蓀はあくまで楽観的であって、たとえば教育事業について「私の教育事業への従事は誰も邪魔をしな

いと予想できる」と述べ、自身に対する批判とは無関係に教育事業を推進できると自信を示した。[70] だが実際には北京大学の学生との間に対立が生じたのは前述のとおりである。また清末に開かれ多くの人材を輩出した学校、中国公学の経営に張東蓀は一九二一年から当たるが、同校で生じた学生運動収拾のため警察を導入し、「新文化」を体現する学生に対し「専制」をもって対処したとの理由で憤激を買った。[71] したがって教育事業が順調だったとはいえない。張東蓀の自身の企図に対するこうした楽観的な見通しは、懐疑の奨励と相まって自身の議論の仕方を見つめ直す機会も減じたようであり、張は結局猜疑や不信を打ち消せなかった。

「もう一つの教訓」の発表からほぼ一年を経て、張東蓀はコール、そして国家主権の絶対性を否定したことで知られるフランスの法学者デュギの議論に啓発され、「政治的多元論」に立脚すると表明する。[72] 政治的多元論について張東蓀は、「現在は新思想が一元論に反対しているだけではない。理性の点から言えば、政治的に一つの勢力が一切を壟断し、一つの機関が一切を統御するのを我々は決して許容できない。我々は新しい潮流に惑わされているのではないが、良心と理性から今日の中国は政治的多元論を提唱しなければならないと感じている。〔中国を〕地理的に連邦国へと分割するだけではなく、職業面から縦に分立させなければならない」と説明している。

人の多様なあり方を尊重し、それを可能にする自由を求め、集権を警戒する張東蓀が、政治的多元論を唱えるようになるのは自然なことである。また特定権力、特に国家主権の至高性・絶対性を相対化し、職能団体など中間団体を重視する議論はイギリスにおいて盛んになされ、日本でも真剣な検討がなされていたから、張東蓀の議論は世界的気運に呼応していたともいえる。

看過できないのは、この気運はそのほかの中国の知識人によっても察知されていた点であり、多数の論考が発表されていた。特にイギリス留学経験者が主導した『太平洋』、胡適や高一涵らを中心とする『努力週報』などは熱心だった[73]。

だが『太平洋』や『努力週報』などが張東蓀の議論に肯定的に言及することはなかったといってよい。張東蓀が招き寄せる猜疑や不信は、その主張の広範な範囲への共鳴を妨げたのである。

興味深いのは、状況の変化により起伏はあるにせよ、張東蓀が後年もボルシェヴィズムが内包するような専制的性質や画一性の強制を拒絶し、また「私は言論の自由がなければ文化は存在しないと考える」と述べるように文化の存立・発展のため言論の自由を希求した点である[74]。同時に社会主義論戦時期同様、こうした意見表明がしばしば論争を招き、批判を浴びた点も注目される。

もちろんなぜ反発を生むのかについては時期ごとに複雑な要因が存在する。その解明は今後の課題とせざるを得ないが、ソヴィエト型の社会主義がもてはやされた社会主義論戦時期に、張東蓀がそれに強く反発し、そのことが生涯を通じて見られる一つの特色となったことは、その後の張につき考察する上で看過できない点だろう。

註

（1）こうした観点に着目した研究として、Yap Key-chong (葉其忠), "Western Wisdom in the Mind's Eye of a Westernized Chinese Lay Buddhist: The Thought of Chang Tung-sun (1886-1962)", Hilary Term, Oxford D. Phil. Thesis, 1991. 張耀南『張東蓀』（東大図書公司、一九九八年）、Patricia Jeane

Cowan, “Zhang Dongsun（1886-1973）Philosopher, Social Democrat, and Pioneer in the Acculturation of Western Thought in China”, Brown University, Ph. D. dissertation, 2003. 但し本稿で考察する問題については、簡単な言及にとどまっている。なお研究解題として、左玉河「張東蓀生平及思想成為学術界研究的熱点——近年来中国大陸的張東蓀研究総述」『中国文哲研究通訊』第九巻第二期、一九九九年、葉其忠「中国大陸以外地区中・英文研究張東蓀管見挙例」同前が有益である。

（2）研究として、丸山松幸「社会主義論戦における中国初期社会主義者たちの思想」『関西大学文学論集』第一七巻第四号、一九六八年、後藤延子「中国におけるマルクス主義の受容——社会主義論戦を中心として」『歴史評論』第三九九号、一九八三年、蔡国裕『一九二〇年代初期中国社会主義論戦』（台湾商務印書館、一九八八年）。張東蓀研究の観点から社会主義論戦にも触れるのは、左玉河『張東蓀伝』（山東人民出版社、一九九八年）、Edmund S. K. Fung, “Socialism, Capitalism, and Democracy in Republican China: The Thought of Zhang Dongsun,” *Modern China* vol. 28, no. 4（October 2002）、戴晴『在如来仏掌中——張東蓀和他的時代』（中文大学出版社、二〇〇九年）。戴晴の著作は史料を博捜しつつ一定の共感を寄せ張東蓀の生涯を描く点で独特だが、社会主義論戦について綿密に考察しているわけではない。また資料集として、新青年社編輯部編輯『社会主義討論集』（新青年社、一九二二年）、鍾離蒙等主編『社会主義論戦』中国現代哲学史資料匯編第一集第三冊（遼寧大学哲学系、一九八一年）などがある。なお『解放与改造』やその後継誌『改造』における張東蓀以外の論者の社会主義論と、張の議論との関係も検討に値するが、この点は蔡国裕前掲書が考察し、本稿の問題設定と直接関わらないので、ここでは論じない。

（3）たとえば左玉河註（2）前掲書、一四〇頁。

（4）東蓀（張東蓀）「第三種文明」『解放与改造』第一巻第一号二号（合刊）（一九一九年九月一日）三—四頁。

（5）東蓀「我們為甚麼要講社会主義？」『解放与改造』第一巻第七号（一九一九年一二月一日）。以下引用は四—五、一三—一四頁。

（6）新学会は、梁啓超や張東蓀、張君勱らが集い、中華民国の思想の革新を企図して一九一九年に結成された。学術団体を自称し、『解放与改造』の発行主体でもあった。詳細は、彭鵬『研究系与五四時期新文化運動——以一九二〇年前後為中心』（中山大学出版社、二〇〇三年）八九—九

一頁。またラッセル来華の詳細は、馮崇義『羅素与中国——西方思想在中国的一次経歴』（生活・読書・新知三聯書店、一九九四年）。

（7）東蓀「由内地旅行而得之一教訓」、「由内地旅行而得之又一教訓」『時事新報』一九二〇年一一月五日、六日。

（8）舒新城（一八九三—一九六〇年）は湖南省の人。張東蓀とはともに中国公学の経営に当たるなど親しい間柄だった。

（9）江春〔李達〕「張東蓀現原形」『民国日報』（上海）（以下全て上海版からの引用である）副刊『覚悟』一九二〇年一一月七日。

（10）力子〔邵力子〕「再評東蓀君底「又一教訓」」『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年一一月八日。陳望道も同様の論旨から論難している。望道〔陳望道〕「評東蓀君底「又一教訓」」『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年一一月七日。

（11）東蓀「答高践四先生」『時事新報』一九二〇年一一月一三日。

（12）陳独秀「独秀復東蓀先生底信」『新青年』第八巻第四号（一九二〇年一二月一日）。引用は一九、二三頁。

（13）東蓀「現在与将来」『改造』第三巻第四号（一九二〇年一二月一五日）。引用は二九頁、三一—三二頁。

（14）東蓀「一個申説」『改造』第三巻第六号（一九二一年二月一五日）。以下引用は五六—五七頁。

（15）なお当時の日本で中国の共管と赤化の問題について持論を展開していたのが内藤湖南である。張東蓀も湖南の「支那の忠告者」（『大阪朝日新聞』一九二一年一月一日）に着目し、共管により中国の政治経済が改造された後、農民が決起して「中国人の中国」を回復するとの湖南の見解に「確かに間違ってはいない」と理解を示しつつ、軍閥の排除などが実現しなければ農民の決起は不可能だとしている。東蓀「農民与中国之前途」『時事新報』一九二一年一月七日。

（16）東蓀「再答頌華兄」『時事新報』一九二〇年一一月二一日。

（17）東蓀註（14）前掲書、五五頁。

（18）コールのギルド社会主義論については、藤原保信「G・D・H・コール——ギルド・ソーシアリズム」同『藤原保信著作集五　二〇世紀の政治理論』新評論、二〇〇六年が詳しい。

（19）たとえば、東蓀「社会主義与中国」『時事新報』一九二一年一月二〇日では、コールの「職能的国家」論に賛同を表明している。

(20) 東蓀註（14）前掲書、引用は五五頁。
(21) 東蓀「職業自由的要求」『解放与改造』第二巻第二号（一九二〇年一月一五日）二頁。
(22) 東蓀註（13）前掲書、三〇頁。
(23) 東蓀「羅素爾的政治理想」『解放与改造』第一巻第一号二号（合刊）（一九一九年九月一日）。張東蓀によれば、ラッセルは *Political Ideals* で、人の衝動を「私有的衝動 possessive impulses」と「創造的衝動 creative or constructive impulses」に区分した。前者の例として財産の追求が、後者の例として科学や芸術上の表現の追求が挙げられる。ラッセルは私有的衝動を最小限に抑えつつ、創造的衝動を高めよと唱えていた。また国家社会主義は集産的にすぎ国家内の各団体を尊重しない、サンディカリズムは各団体を主権国家のように扱い既存の主権国家の役割を否定するため団体間紛争を調停できない、アナーキズムは私有的衝動を抑制する政治権力をも否定する、としていずれも退けており、張東蓀もこの見解に賛同していた。
(24) 『解放与改造』・『改造』は、日本の社会主義論を多く紹介しており、その中にはギルド社会主義者、室伏高信の議論も含まれる（たとえば周仏海訳「工行社会主義之国家観」『解放与改造』第二巻第一〇号、一九二〇年五月一五日）。張東蓀も室伏の議論に注意しており（註（13）前掲書、三一頁）、日本の議論の動向には敏感だった。
(25) 東蓀註（11）前掲書。
(26) 東蓀「指導競争与運動」『解放与改造』第一巻第一号二号（合刊）（一九一九年九月一日）七二頁。
(27) 東蓀「答若愚君」『時事新報』一九一九年一月二五日。
(28) 東蓀「過激主義之預防策」『時事新報』一九一九年一月二三日。
(29) 張東蓀「読章秋桐政本論」『正誼雑誌』第一巻第四号（一九一四年四月一五日）四頁。
(30) 「布爾什維克与世界政治――羅素在湖南講演」（李済民・楊文冕筆記）『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年一一月三日。
(31) 東蓀「大家須切記羅素先生給我們的忠告」『時事新報』一九二〇年一一月一四日。
(32) 程振基「社会主義与資本主義」『評論之評論』第三号（一九二一年三月二一日）。引用は四、六頁。程振基（一八九一―一九四〇年）は安徽省の人。「英国労働組合及其最近的趨勢」『新青年』第七巻第六号（一九二〇年五月一日）などの文章を発表しており、留学先であるイギリスの労働運動の事情に明るかったようである。

(33) 高一涵「羅素的社会哲学」『新青年』第七巻第五号（一九二〇年四月一日）。柯爾（G. D. H. Cole）（高一涵訳）「廃止工銭制度」『新青年』第八巻第六号（一九二一年四月一日）。なお高一涵についての詳細は、拙稿「五四前後における高一涵の思想形成」『中国　社会と文化』第二五号、二〇一〇年を参照されたい。

(34) 高一涵「関於資本主義和社会主義的争論的我見」『評論之評論』第三号（一九二一年三月二一日）。引用は二―三頁。

(35) 耿雲志主編『胡適遺稿及秘蔵書信』第三一冊（黄山書社、一九九四年）一八二頁。張東蓀の羅家倫への書簡は『時事新報』副刊『学灯』通訊欄（一九二〇年一月二四日）に掲載されている。

(36) 志希〔羅家倫〕「『解放与改造』」『新潮』第二巻第二号（一九一九年一二月一日）。

(37) 『時事新報』副刊『学灯』通訊欄（一九二〇年一月二四日）。

(38) 同前。季融五（一八七八―一九三二年）は江蘇省の人。女性の教育に尽力したことで知られる。

(39) 孟真〔傅斯年〕「破壊」『新潮』第一巻第二号（一九一九年二月一日）三五一頁。

(40) 東蓀「破壊与建設是一不是二」『時事新報』一九一九年二月六日。

(41) 東蓀「『新潮』雑評（続）」『時事新報』一九一九年一月二二日。

(42) 東蓀註（40）前掲書。

(43) 東蓀「思想中毒与批判的批判」『時事新報』一九二〇年一月八日。

(44) 東蓀「答李儀賓」『時事新報』一九一九年八月一七日。

(45) 東蓀「畛域」『時事新報』一九一九年九月七日。

(46) 東蓀「我的非国会主義」『時事新報』一九二〇年二月二九日。

(47) 君勱〔張君勱〕・東蓀「中国之前途：徳国乎？俄国乎？」『解放与改造』第二巻第一四号（一九二〇年七月一五日）一四頁。引用部分は張東蓀の執筆部分である。

(48) 東蓀「不親近政権」『時事新報』一九一九年一月四日。

(49) 東蓀「民治」『時事新報』一九一九年一月三日。

(50) 楚傖〔葉楚傖〕「与張東蓀書」『民国日報』一九二〇年七月二一日。

(51) 研究系の詳細は、彭鵬註（6）前掲書、原正人「近代中国知識人に関する一考察――研究系の思想と行動、一九一二～一九二九」（二〇〇八年度一橋大学博士論文）。

（52）形天〔茅盾〕「客座雑憶――『新青年』談政治之前後」『筆談』第一期（一九四一年九月五日）、三九頁。

（53）Chao Yuen-ren（趙元任）, *Yuen Ren Chao's Autobiography: First 30 Years, 1892-1921, Life with Chaos: Volume 2*（Ithaca: Spoken Language Services, 1975）, p. 104. なお趙は進歩党と述べているが、ここでは研究系を指すと考えてよいだろう。

（54）東蓀註（11）前掲書。

（55）ちなみに、張東蓀の翻訳で知られるベルクソンの著作 *L'évolution créatrice*（1907）の中国語版『創化論』（一九一九年）も、その翻訳の精度を疑問視する批評を度々受けていた。一例として、力子「訳書的我見」『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年七月八日。

（56）その具体的状況については、丁文江・趙豊田編（島田虔次編訳）『梁啓超年譜長編』第四巻（岩波書店、二〇〇四年）三三九、三六八―三七一頁。

（57）傅斯年「答時事新報記者」『新潮』第一巻第三号（一九一九年三月）。

（58）力子「貧民性格与民意政治――駁張東蓀君」『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年七月二二日。

（59）力子「中国公学風潮平議」『民国日報』副刊『覚悟』一九二一年一〇月二四日。

（60）王光祈「政治活動与社会活動」『少年中国』第三巻第八期（一九二二年三月）。引用は四川省音楽学院等編『王光祈文集』四（巴蜀書社、二〇〇九年）一三一頁。

（61）力子「弁論者的態度」『民国日報』副刊『覚悟』一九二〇年一一月二三日。

（62）同前。

（63）張東蓀『理性与民主』（商務印書館、一九四六年）一五〇頁。

（64）東蓀註（14）前掲書、五四頁。

（65）東蓀「政治上懐疑論之価値」『時事新報』一九一九年二月四日。

（66）Walter Bagehot, *Physics and Politics*（Boston: Beacon Press, 1956）, pp. 115-118.

（67）*Ibid.*, p. 120.

（68）張東蓀は晩年の回想で、進歩党にも研究系にも参加したことはないと記したが、問題は当時そのように受け取られなかったことにある。この回想については、戴晴註（2）前掲書、一八六―一八七頁。

（69）東蓀「批評与研究」『時事新報』一九二〇年一一月二日。

(70) 東蓀「各方面的実做」『時事新報』一九二〇年一一月一五日。
(71) 「中国公学之風潮」『民国日報』一九二一年一〇月一三日。
(72) 東蓀「政治的多元論」『時事新報』一九二一年一〇月二七日。
(73) 『太平洋』については、拙稿「『太平洋』雑誌と和平の追求——五四前後における国内秩序論と国際秩序論」『中国哲学研究』第二四号、二〇〇九年で論じている。『努力週報』の関連記事としては、慰慈〔張慰慈〕「多元的主権論」『努力週報』第一九号（一九二二年九月一〇日）、高一涵「希望反対連邦論者注意　最近的国家性質新論」同第三七号（一九二三年一月一四日）などがある。
(74) 張東蓀『思想与社会』（商務印書館、一九四六年）三頁。

［付記］本稿は平成二二年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（東京大学大学院人文科学系研究科博士課程生・日本学術振興会特別研究員ＤＣ）